

Matilda における「見えざる手」

共同体の再構築へ向けた Roald Dahl の意志

中迫 史音

Roald Dahl (1916-1990) の作品群の中でも *Matilda* (1988) はほぼ唯一、同時代の社会問題に明確に焦点を当てた作品である。これは Dahl が、当時の英国首相 Margaret Thatcher (1925-2013) の政権下で、実際に教育改革を目の当たりにした背景が関係している。市場原理があらゆる分野に適用され、自助努力に基づく個人主義が台頭したことによる人間疎外を描いた *Matilda* であるが、本作は、前半のいわゆる写実的な描写から一転して、物語後半では主人公が突然超能力を獲得し、その結果 1980 年代当時に既に批判の対象となっていた社会体制を体現する悪役が裁かれることとなる。Dahl はこの能力を「何百万の小さな見えざる手」あるいは「見えざる腕」と表現した。この表現でまず想起されるのは Adam Smith (1723-1790) の言説だが、市場原理が再評価された英国の社会状況にあって、Dahl はそれをいわば反転させた。さらに、「何百万の小さな」という表現を加えることで、Dahl は「見えざる手」の中に、体制下で苦しむ多くの非力な存在を示唆し、その集合を呼びかけたのである。本発表ではこの「見えざる手」に関連した表現を詳細に分析し、Thatcher 政権下で人間的繋がり喪失や共同体の崩壊が嘆かれる中、被抑圧者たちの堅固な社会的連帯による解決を訴える Dahl の声を明らかにして、*Matilda* の再解釈を試みた。

Matilda 執筆当時の 1980 年代英国は、保守党の Thatcher 主導の下、それまでの福祉国家路線から大きく舵を切り、小さな政府路線へと方針転換がなされた時代にあった。しかし、そのような政策の転換は、例えば Ian McEwan (1948-) が新政権下の英国社会の様相を “[m]oney-obsessed, aggressively competitive and individualistic, contemptuous of the weak, vindictive towards the poor, . . . and individual gain against communal solutions” と表現したように (xxiv)、当時の英国作家たちの厳しい批判を招いた。この新体制を危惧したのは Dahl も例外ではない。*Matilda* に登場する二人の悪役、主人公の父親で、金儲け主義の高慢な中古車売買業者 Mr Wormwood と、彼と共鳴する利己的な女校長 Miss Trunchbull は、まさに McEwan が嘆いたような共同体意識を欠いた個人主義の社会の負の面を、戯画的に体現している。なかでも Miss Trunchbull は、その教育方針に、Thatcher 政権下で導入されて以降、教育現場からの不満が相次いだ国立カリキュラムの特徴が色濃く反映されている点に加えて、「鉄の女」を彷彿とさせる鋼鉄のような身体性を併せ持つことから、特に Thatcher を連想させる人物として登場する。そして、この Miss Trunchbull を打倒するのが、彼女から不当な扱いを受けたことをきっかけに、主人公が突如目覚める超能力だ。

Dahl は、この力を “millions of tiny little invisible arms with hands” や “millions of tiny invisible hands” などと表現し (*Matilda* 165, 211)、作中で繰り返し強調している。こうした表現から自ずと想起されるのは、18 世紀に Adam Smith が提唱し、その後、自由放任の市場原理を支える言説としてヴィクトリア朝期英国に普及した “an invisible hand”、つまり「見えざる手」の理論であろう (Smith 215)。市場の自動調節機能をたとえたこの言説については、Smith の提唱以降、“God’s invisible arm” といった “hand” に関連する表現を伴った言及も散見される (Henwood 180)。そして、*Matilda* が執筆された当時、自助努力を含めたヴィクトリア朝的な価値観への回帰が宣言されると共に、自由な市場競争を支える個人主義が再評価された 1980 年代英国の文脈において (Thatcher)、市場原理ないし「見えざる手」は無視できない存在であり、同時代の作品の中で、物語の主要素に同様の表現を取り入れた作家の意図は明らかである。すなわち、Dahl は「見えざる手」と言いつつも、Smith の言説を反転させることで体制を批判しており、この時、「見えざる手」は市場原理を根底に置く体制に加担するものではなく、むしろそれを覆すものとしてあらわれるのだ。

体制を覆す力として Dahl が取り入れた「見えざる手」は、*Matilda* において、痛烈な社会風刺の要素としてその効果を発揮している。さらに注目すべきは、Dahl が体制批判にとどまらず、作中で「何百万の小さな見えざる手」に象徴される被抑圧者たちによる連帯を促した点だ。例えば、傍若無人な Miss Trunchbull の支配下に置かれながらも抵抗を続ける自分たちを “the crusaders” と呼ぶ上級生 Hortensia は、女校長への対抗策として、主人公たちに “We all try to support each other” と訴える (109)。さらに、超能力発現の直前に置かれた章では、校長に抑圧されてきた生徒たちがかつてない一体感をもつことで、初めて生徒側が校長に “triumph” を収める場面が描かれ (133)、その後の超能力発現時の場面においても、力の発現につられるように、生徒たちが突然一丸となって校長に立ち向かう姿が描写される (168-9)。また、*Matilda* の類似作に *The Magic Finger* (1966) があるが、二作品は、全体の構成や作中の表現は似通っているものの、初期作品の *The Magic Finger* には、*Matilda*

にあるような連帯の要素はみられない。こうした違いからも、力無き弱者または被抑圧者たちの結束を訴える本作の意図は明白であり、このメッセージは当時の社会状況と深く結びついていたことが窺える。

Dahl のこうした問題意識は、石油危機などにより福祉国家路線の修正へと社会が動き始めた 1970 年代には、既に作品の中に兆候としてあらわれている。1960 年出版の *Kiss Kiss* に収録された短編小説 “The Champion of the World” を基にした *Danny, the Champion of the World* (1975) において、Dahl は、大まかなあらすじこそ変更しなかったものの、*Danny* では、舞台となる村の共同体の構成員を登場人物として追加しつつ、“It was beginning to look as though just about everybody in the entire district was in on this poaching lark” という、主人公の独白に代表されるように (155)、村全体が一丸となる描写を補強し、悪役の成金男を懲らしめる彼らの連帯を強調した。これらの改変には、小さな政府へと向かう社会変化の兆しを感じた Dahl の視座が反映されていると言えよう。同様の問題意識が根底にある *Matilda* は、この流れの中で読むことができるのである。

また、こうした問題に言及する際、*Matilda* において効果的な風刺を生んだのが「見えざる手」の反転構造だが、そもそも反転自体は、Dahl が初期から得意とする小説的技法であった。料理人の青年が食肉として加工工場で豚同様に処理される初期短編小説 “Pig” (1960)、狩猟を最大の娯楽とする一家が狩猟対象の鴨に変えられてしまう *The Magic Finger*、後期作品では、赤ずきんが狼に食べられることなく、むしろ狩る側に回る “Little Red Riding Hood and the Wolf” など、伝統的な童話とその教訓を覆す作品が収録された *Roald Dahl's Revolting Rhymes* (1982) が例として挙げられる。このように、反転構造は、Dahl 作品特有のブラック・ユーモアを生み出す代表的な技法だった。ところが *Matilda* においては、この構造に、同時代で強い影響力を有した言説が持ち込まれており、そのことがより鋭い社会風刺を生んでいる。さらに Dahl は、体制側の言説を覆すと同時に、その言説に基づく社会で抑圧され、周縁に追いやられる人々に目を向けつつ、彼らの団結や連帯という解決策を作中に併せて提示した。この点において *Matilda* は、Dahl 作品の中でもきわめて新しいと言えよう。

英国の伝統的な共同体の崩壊は、二つの大戦後まもなくから論じられてきたが、今日、その問題はさらに深刻さを増している。その一端を担った Thatcher 時代の市場原理を活かした政策の危うさを、Dahl は時代の当事者として強い問題意識を持ち、*Matilda* の中で鋭く指摘している。しかし、Dahl のメッセージは単なる警告にとどまらない。

この物語は、主人公が地元の人々や、生徒、教員と繋がり合い、周囲の助けを得ながら才能を伸ばして健やかに暮らし、最終的には主人公とその担任教師 Miss Honey が、真の親愛で繋がれた「家族」となって結末を迎える。すなわち、Dahl は本作 *Matilda* を社会風刺小説として終わらせるのではなく、共同体の崩壊が危惧された 1980 年代英国社会の状況に対して、問題解決の糸口も同時に示したのだ。ここに Dahl の共同体再構築の意志がある。人間的繋がりに支えられた共同体にこそ将来性を見出した作者は、本作で、特に、被抑圧者たちによる堅固な社会的連帯を訴えた。Dahl はそこに共同体喪失の危機を乗り越えるための光明を見たのではないだろうか。今後は、本発表で検討したような *Matilda* のメッセージ性に関連する 1980 年代英国小説をより多く取り上げ、それらと本作の影響関係について考察していきたい。

Works Cited

Dahl, Roald. “The Champion of the World.” *Kiss Kiss*, 1960; Alfred A. Knopf, 1983, pp. 271-308.

---. *Danny, the Champion of the World*. Alfred A. Knopf, 1975.

---. *The Magic Finger*. Harper & Row, 1966.

---. *Matilda*. Jonathan Cape, 1988.

---. “Pig.” *Kiss Kiss*, 1960; Alfred A. Knopf, 1983, pp. 242-70.

---. *Roald Dahl's Revolting Rhymes*. 1982; Jonathan Cape, 2004.

Henwood, Doug. *Wall Street: How It Works and for Whom*. Verso, 1997.

McEwan, Ian. *A Move Abroad: or Shall We Die? and The Ploughman's Lunch*. Pan Books, 1989.

Smith, Adam. *The Theory of Moral Sentiments*. Edited with notes by Ryan Patrick Hanley, Penguin Books, 2009.

Thatcher, Margret. “TV Interview for London Weekend Television Weekend World (‘Victorian Values’).” *Margret Thatcher Foundation*, 16 Jan. 1983, www.margarethatcher.org/document/105087. Accessed 30 Jun. 2022.